

小館衷三編『郷土史事典 青森県』

浅倉有子

今度、昌平社より「郷土史事典シリーズ」の一環として、小館衷三編『郷土史事典青森県』が刊行された。平易で親しみ易い歴史を、という意図に基き発刊された同シリーズは、「事典」という名が示すように、全体が一三〇ほどの小項に分かれており、各項ごとに完結される内容が記されているので、目次を引くことにより「辞典」としても活用できる。また、通読すれば、そのまま概説書として利用できるように、時代を追った記述がなされている。

以下、簡単ながら、『郷土史事典青森県』について、紹介してゆきたい。本書は、大きくは次のような構成をとっている。

風土と歴史と人

原始

謎にみちた青森の原始時代

古代・中世

津軽と糠部の遠い昔

支配者たちの興亡

南部氏の制庄

近世

津軽藩と南部藩の成立

近世の産業と文化

飢饉と改革

幕末の世

近代

転換期の苦悩

言論と新産業へ

これら大見出しの下に、前述した小項がそれぞれ付随している体裁である。

原始時代は、縄文文化を中心に、土器、埋葬等の記述がなされており、青森県に弥生文化が存在したのかという疑問等も含め、実証的な著述がなされている。

古代・中世では、南部氏をめぐる抗争を中心としながらも、その中で、三戸・八戸の名前の由来にふれるなど、素朴な疑問に答えている。

近世は、津軽・八戸南部両藩の藩制史研究の蓄積を背景として、政治史を中心に多岐にわたる内容が著述されており、近世史全般をよく網羅している。その中で、「津軽藩々庁日記」「たしなみ草」等の史料にも論及がなされているが、もう一步筆を進めて、その他の弘前・八戸両市立図書館所蔵の史料に関して一項を設けてはしか

ったと思う。また、史実の安易な断定が若干見られたように思うが、疑問は疑問としてそのまま掲げた方がよかったのではなからうか。

近代においては、明治維新に際しての津軽・南部両藩の動揺から、その後の県議会をめぐる動向、りんご栽培に至るまで記述が及んでいる。

全体を通じた本書の特色として、第一に、原始から、明治中期までがよくカバーされていること、第二に、政治史を中心としながらも、流通・民間信仰等までの多岐にわたる内容が網羅されていること、第三に、その多様な内容が、一三〇の小項目に簡潔に整理されていること、が掲げられよう。従って、当初の意図通り、青森県に関する平易な概説書・事典としての役割を充分に果たしており、各執筆者の苦勞がしのばれる。

ここで、あえて苦言を呈するならば、項目によっては、歴史の副産物にすぎぬエピソードに終始しているものが少々あるということである。前述した本書の意図を汲みこんでの配慮とも推察されるが、広汎な読者層を期待した事であるだけに、読者の歴史認識を深めるという意味からも、残念であると思う。

以上、誤読、理解不足の点は、筆者の勉強不足によるものである。御寛恕を請う。

他の学問とは異なる間口の広さが、歴史学の特徴の一つであるとするならば、本書の刊行によって、ますます歴史学がその入口を広くすることを、切に願うものである。(B6判、本文一九五ページ、昌平社刊、定価九八〇円)

(お茶の水女子大学大学院)